

## 追悼

### 木村英夫氏のご逝去を悼む

東京農業大学教授

平野 侃三

木村さんに最初にお会いしたのは北村徳太郎先生の自宅で正月にお会いしたのか、ガーデン協会だったのか、今では定かではありません。当時埼玉県計画課長をしておられたと思います。若い者にも気軽に声をかけられる気さくな先輩でした。

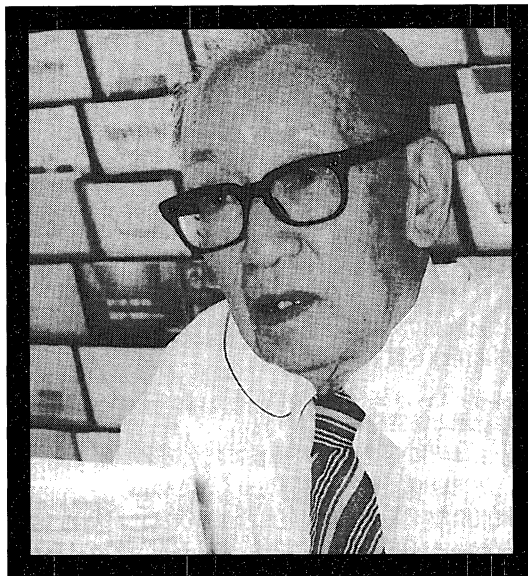
昭和32年に建設省の施設課長に戻られたとき、私は都市計画課の最も若い技師の一人となりました。その頃、ガーデン協会の機関紙「ガーデン」の編集を手伝っておりましたが、その埋草に毎回、海外雑誌等の記事の内容を紹介したりしていました。当時の木村課長が若輩の私に「なかなか面白いし、役立つね」と言われ、大変励みになったのを今でも思い出します。それは確かイギリスのTown and Country Planningに載っていたスエーデンの交通公園を紹介したときのことでした。その後、この交通公園は建設省の施策公園の第一号として、全国で造られるようになりました。

このように木村さんは常に何事にも心細かく気配りをされ、じっくりと公園行政を軌道に乗せて行った人でした。

昭和12年内務省の技師となられてからは北村徳太郎氏の下、満州や日本全国に散って活躍をしている造園技術者の本部の守り役として、戦中、戦後の最も厳しい時代を守り通したと言ってもいいのではないのでしょうか。

この時代に専門学校や大学を卒業された造園の人々、また、戦後引き揚げられてこられた人々を全国の都道府県や市に働きかけて送り込み、今日の全国的展開の基礎を築かれたのは木村さんであるといっても過言ではないと思います。

20年程前に日本造園学会の企画で、防空緑地のお話をお聞きする機会がありました。その時は細かいメモを予め用意をされて、詳細にお話をいただきました。いろいろと脱線しながら当時の状況を懐かしげに話しておられたご様子が今で



故 木村英夫 氏

本会の名誉会員 木村英夫氏には

平成13年8月22日永眠されました。

ここに慎んで哀悼の意を表します。

社団法人 日本都市計画学会

も目に浮かびます。その後、木村さんが戦中に書かれて未発表であった「都市防空と緑地・空地」という原稿が、1990年に日本公園緑地協会から出版され、当時、防空に名を借りて極めて質の高い公園緑地計画が考えられ、その実現に向けて努力されていたご様子が良くわかります。

晩年は耳が遠くなられてあまりご活躍されておられなかったのは誠に残念でした。

一昨年、日本造園学会の大会で基調講演をしたとき、目の前に木村さんが座っておられました。100年を振りかえって、21世紀を展望する話だったのですが、「歴史の話だったんだろう。書いたものがあったら見せてくれんかね」と言われました。大変お元気そうでしたが、今考えてみると、そのとき木村さんは90才だったわけで、学会に来られただけでも凄いことなのに、きっとその場でよく聞こえていたら貴重なご意見を聞かせていただけたのではないかと残念至極です。

温厚篤実と言う言葉は、将に木村さんにふさわ

しい言葉だと思えます。そこに居られるだけで温かみを感じず方でした。

価値観の多様化、環境悪化等、これから本当に厳しい時代を迎える時代に、最も変化の大きかった時代の歴史の証人としてのお話をうかがうことも、叱咤激励していただくことも出来なくなり誠に残念です。

体調を崩されてからの一年余りお伺いしないうちに二度と温顔に接することが出来なくなったのは慙愧の至りです。

心からご冥福をお祈りいたします。

## 木村英夫先生の御経歴と御業績

東京農業大学教授

蓑茂 寿太郎

本会名誉会員の木村英夫先生が、平成13年8月22日にご逝去された。92歳の天寿を全うされた感がある。先生は、明治42年3月20日に島根県浜田で中学校の教師をしておられたお父さんと、先生9歳の時にお亡くなりになられたお母さんの長男としてお生まれになっている。その後、お父さんが神戸の甲南女学校に転任されて西宮住まいになったため、芦屋の甲南中学校、甲南高等学校に学ばれ東京帝国大学に進まれた。昭和8年に農学部農科を卒業され、大学で1年間だけ副手をなさった後、都市計画大阪地方委員会に2年、内務省、そして神宮司庁にもそれぞれ2年と就職難の折に事務嘱託を経験された。昭和12年に内務技手となり、内務省計画局都市計画課、内務省防空総本部勤務で終戦を迎えられた。戦後は、内務省国土局計画課を皮切りに、戦災復興院計画局施設課、総理庁建設院都市局計画課、建設省都市局計画課と国の行政機関を経験された。昭和24年に埼玉県土木部計画課長に出向され都市計画の最前線を経験された。秩父多摩国立公園の指定が昭和25年になされ、その周囲に県立自然公園を計画することになり、昭和26年から31年まで県の計画観光課長を歴任された。そして、昭和32年に建設省計画局施設課長として国に帰られ足掛け五年間勤められるが、昭和36年に再び埼玉県に土木部長の要職で迎えられ

ている。この職を最後に、昭和40年に第一線を退かれてからは、埼玉県住宅供給公社専務理事、王子緑化株式会社技術顧問、沖縄熱帯植物管理株式会社取締役などをお勤めになっている。

先生の御経歴に見るように、紀元2600年事業に関係した神宮関係施設等の計画、東京緑地計画に続く戦時体制下での防空を含む総合都市計画、戦災復興事業、昭和31年に制定された都市公園法の運用、埼玉県におかれては江戸川の改修事業に関連した土地区画整理事業、国道17号バイパス計画、県立自然公園指定に尽力され、東京オリンピック関連施設計画でも力量を発揮されている。特に第二次世界大戦前後の期間において先生がご経験された都市計画の最前線は、わが国都市計画史に欠くことのできない数ページを占めるもので、先生の著書『都市防空と緑地・空地』は、そのバックデータとして高く評価されている。私個人としては、ガリ版刷りとカーボンコピーの「神宮関係施設計画綴り」をめくりながら、神都計画のお話をお聞かせ頂いたことを先生との思い出にしている。

先生の後略歴を語るとき、関連学協会での活躍とご貢献を抜きにすることはできない。先生が、日本都市計画学会はもとより、日本造園学会の名誉会員でもあったこと。さらに、(財)日本造園修景協会の会長や顧問をおつとめになった記録が、その存在の大きさを如実に物語っている。先生の人柄有っての関連学協会の融和であったと言って良いであろう。

このほか、審議会関係では、歴史風土審議会、埼玉県都市計画審議会、群馬県都市計画審議会に関係され、活動の足跡を残されている。また、東京農業大学造園学科、東洋大学工学部、東京大学農学部及び国土建設学院の非常勤講師も歴任されているが、これにおいても短に一コマの授業を担当するだけでなく、親身になって学生の就職の相談・斡旋に当たられたと伺っている。

先生は、つい最近まで本当にお元気であった。晩年は、特に学会と実業界との関係を強固にすることの必要性を指摘されていた。21世紀を迎えて、過去の歴史認識にたった変革が求められる時期に、重鎮を失ったと感じざるを得ない。これまで私達にご薫陶いただきましたことに感謝申し上げます、先生のご冥福をお祈り申し上げます。